

## 【西部地区の調査概要】（第4図参照）

西部地区では個人住宅の建築に伴い隣接する4ヶ所の調査（第95・102・103・106次）を行いました。ここでは主に江戸時代の遺構・遺物について紹介します。

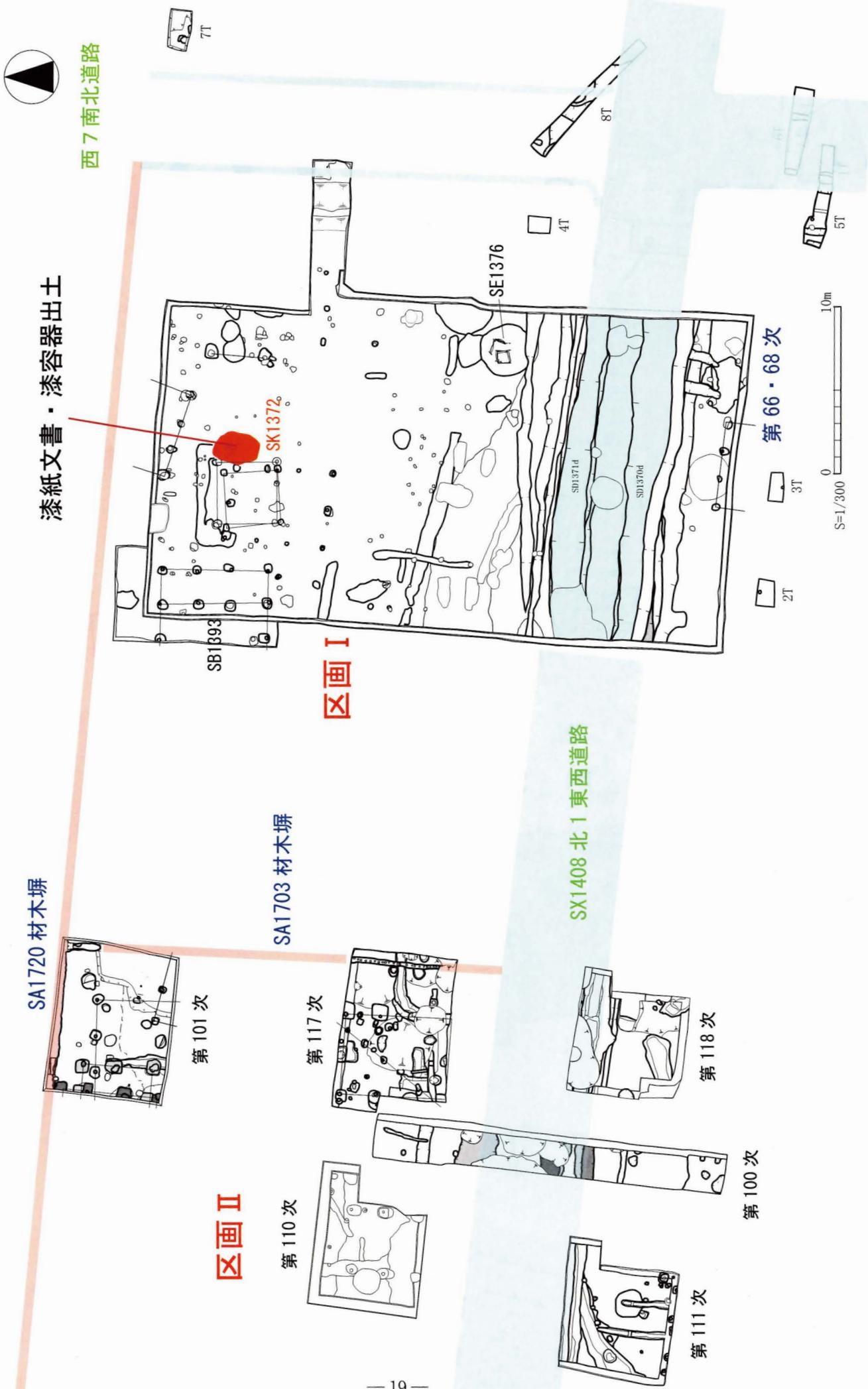
各調査区で掘立柱建物跡、井戸跡、堀跡、土壙などが発見されました。堀跡は屋敷との境界を示す区画溝と考えられます。第103次調査区では特に興味深い遺構が発見されています。隅丸方形の掘方を掘り、埋め戻しを行った後にすり鉢をすえたもので、鉢の口縁部付近には炭混じりの土がみられます。また、第106次調査区で発見した遺構は、掘方を掘った後に立板を円形に並べ1枚の板を底板としてすえています。直径約30cm、深さ約30cmを計ります。内部の土には何も含まれていませんでした。その構造や形態からすると江戸時代の墓に類似していますが、大きさがひとまわり小さいようです。これらの遺構の埋土を分析（リン・カルシウム分析）したところ、骨・歯などの存在を示すデータが得られています。葬送儀礼や埋葬に係るものとも考えられ、今後の課題となりました。

また、陶磁器や土人形・犬などの当時の日常生活をしのばせる用具類も出土しました。これらの遺構・遺物は、江戸時代の塩竈街道（旧県道泉塩釜線）沿いに暮らした人々の痕跡を示すものです。この地域は江戸時代初めごろに伊達家家臣成田勝重が福島県伊達郡から移住した地とされています。

## 3 まとめ

東部地区の調査で判明した成果をまとめると以下ようになります。

- (1) 本地区周辺における方格地割の施工は、改めて9世紀後半代であることを確認しました。これはこの時期に方格地割の南北への拡大に伴い階層による宅地割がなされたとする通説に対して見直しを迫るものであり、東から西へと段階的に方格地割が施工されて行った可能性も考慮する必要がでてきました。
- (2) 方格地割内において材木堀で区画される敷地の存在を確認しました。その宅地の広さは、東西約50m、南北約30mの大きさです（区画Ⅰ）。
- (3) 区画Ⅰは出土した遺構・遺物の特徴からみて漆工房やその工人の居宅と推定されます。一方、その西側の区画Ⅱは、区画Ⅰと比べて遺構の密度も高く、建物も建て替えられているなどの相違があります。
- (4) 材木堀による宅地内区画施設の発見は、国司館とされている多賀前地区の事例に次ぐものです。多賀前地区でも南北約30m間隔で区画されており、本例と同じ状況を呈しています。当時の宅地の規格を考えるうえで重要な発見と言えるでしょう。



第78次

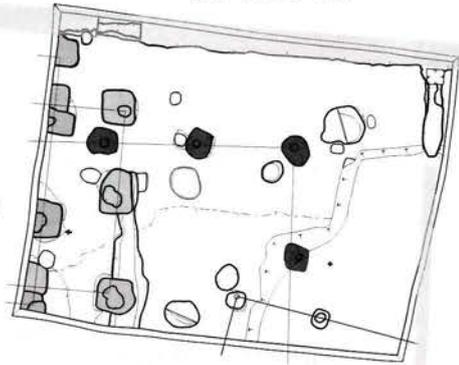
第2図 山王遺跡町地区（東部）と周辺調査区との位置関係図



SA1720 材木塀跡

建物跡 (平安時代)

建物跡 (平安時代)

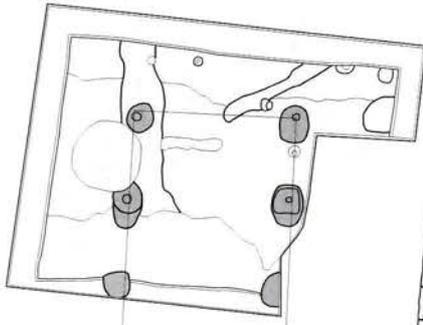


建物跡 (平安時代)

第101次

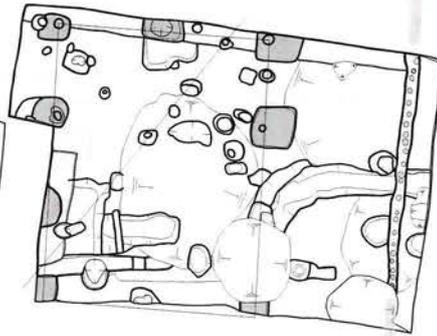
SA1703 材木塀跡

第110次



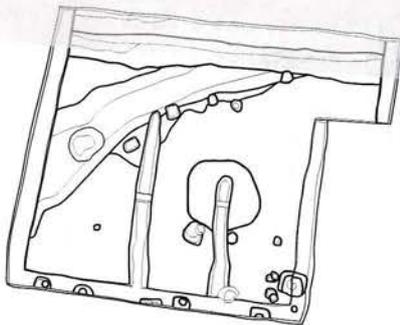
建物跡 (江戸時代)

第117次



建物跡 (平安時代)

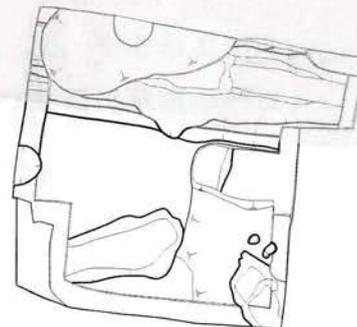
北1東西道路跡



第111次



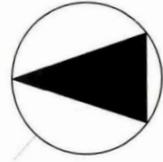
第100次



第118次

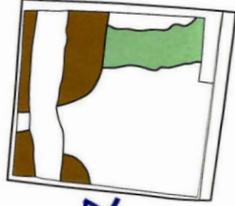


第3図 山王遺跡 (町地区) 東部の発見遺構全体図



土壇 (江戸時代)

第102次



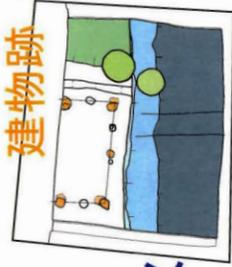
溝跡 (古代)

建物跡 (江戸時代)

井戸跡 (江戸時代)

北2道路跡 (古代)

第95次

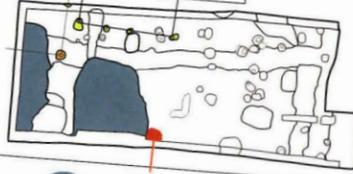


堀跡 (江戸時代)

第106次

堀跡 (江戸時代)

木棺墓?



建物跡 (江戸時代)

建物跡 (江戸時代)

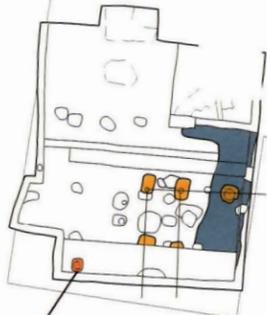
旧県道泉塩釜線

第103次

すり鉢埋設遺構

建物跡 (江戸時代)

堀跡 (江戸時代)



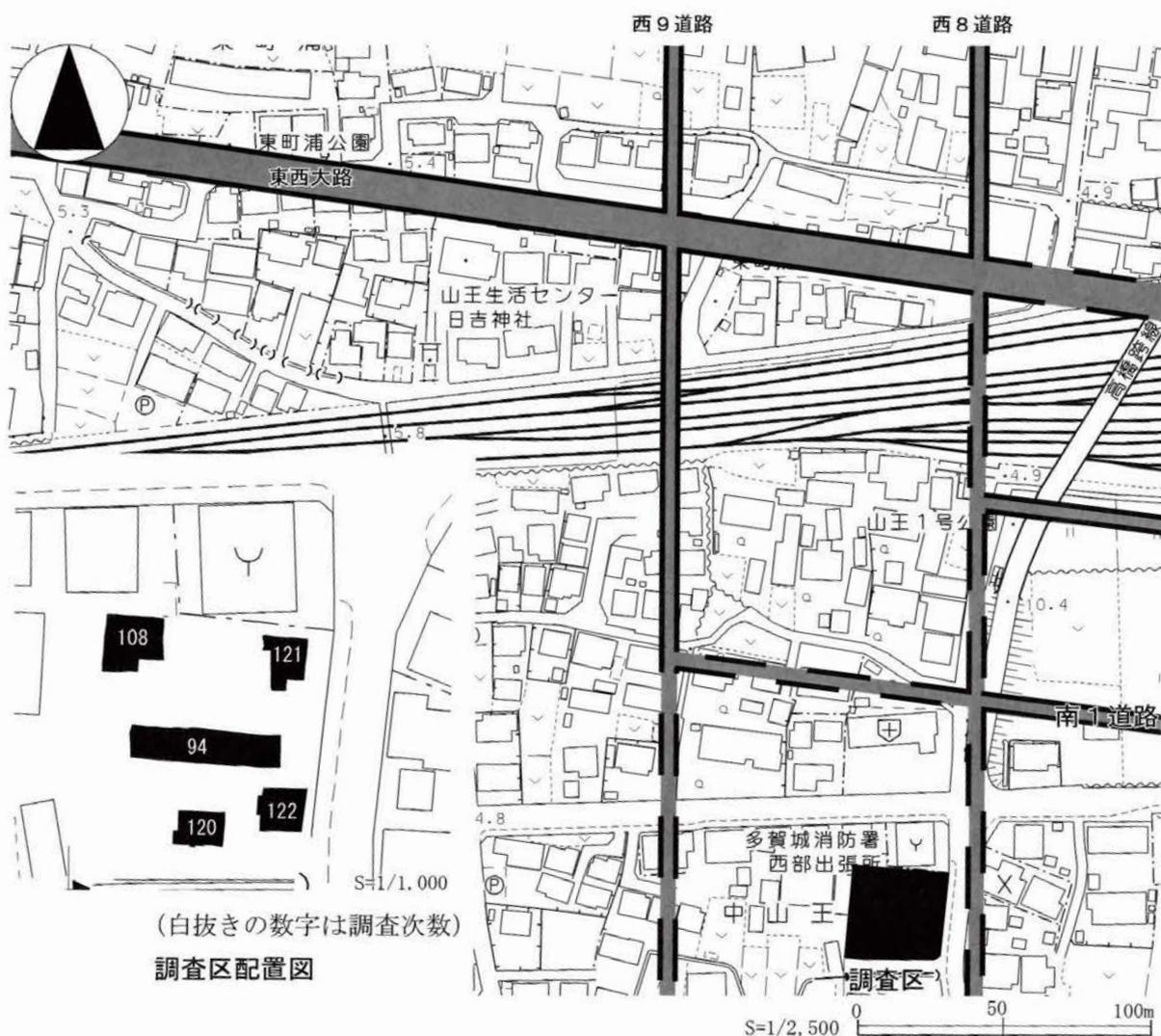
20m

第4図 山王遺跡 (町地区) 西部の発見遺構全体図

## IV 山王遺跡中山王地区の調査

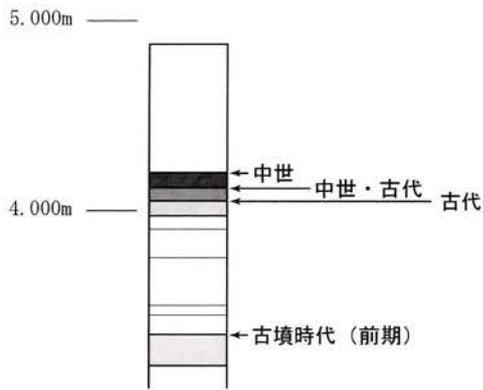
### はじめに

山王遺跡中山王地区では、平成23・24年度の2カ年で5件の調査（第94・108・120・121・122次調査）を行いました（第1図）。このうち第120次調査を除くすべての調査は、震災復興に伴うものです。当該地区では、古墳時代から江戸時代にかけて、4面にわたる人々の生活の跡があり、それぞれにおいて遺構・遺物を発見しました（第2図）。以下、時代ごと成果を説明します。



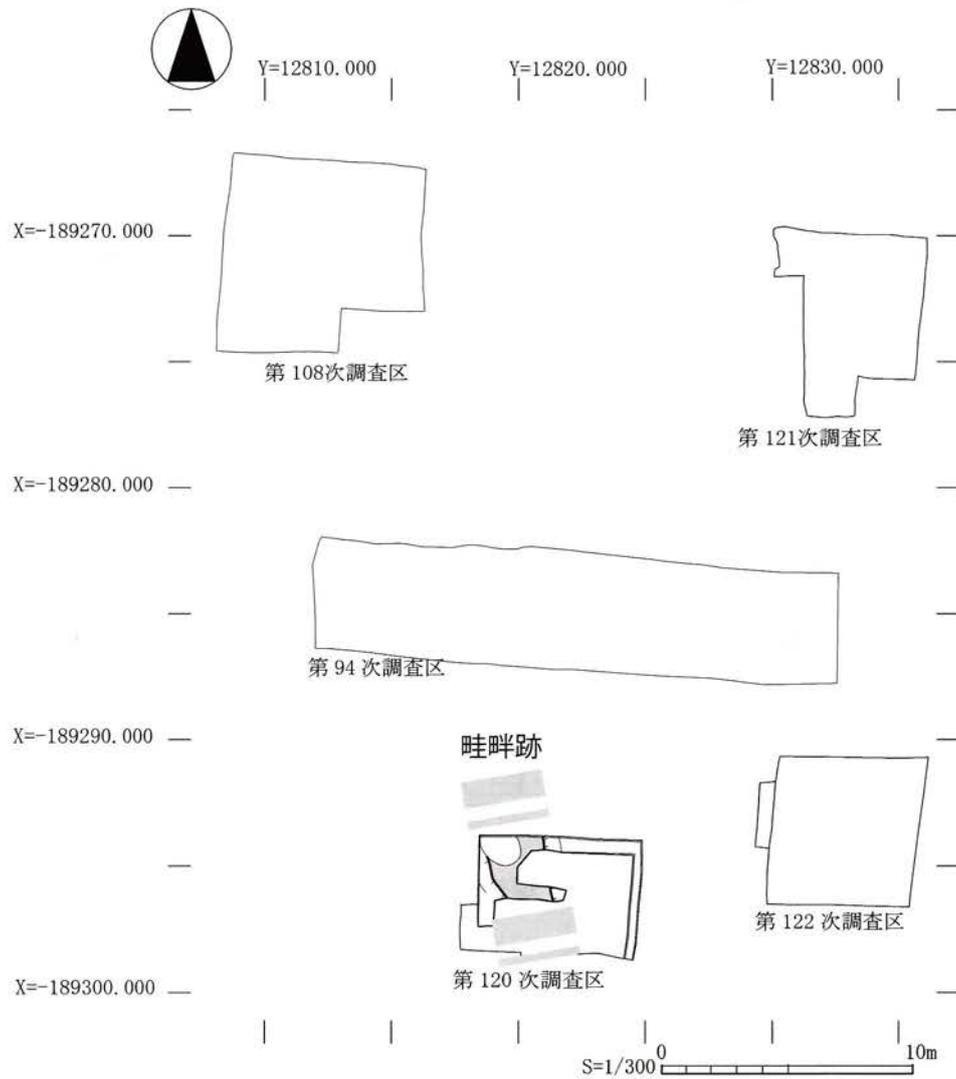
### 1 古墳時代（第3図）

前期（4世紀頃）の水田を区画する畦畔<sup>けいはん</sup>を第120次調査区で発見しました。この畦畔は、上幅が2.2mもあり、規模が大きい畦畔といえます。また、ほかの調査区でも



第 2 図 土層模式図

蛙畔（第 120 次） 中央の黒い部分が蛙畔 北西から



第 3 図 山王遺跡中山王地区平面図（古墳時代前期）

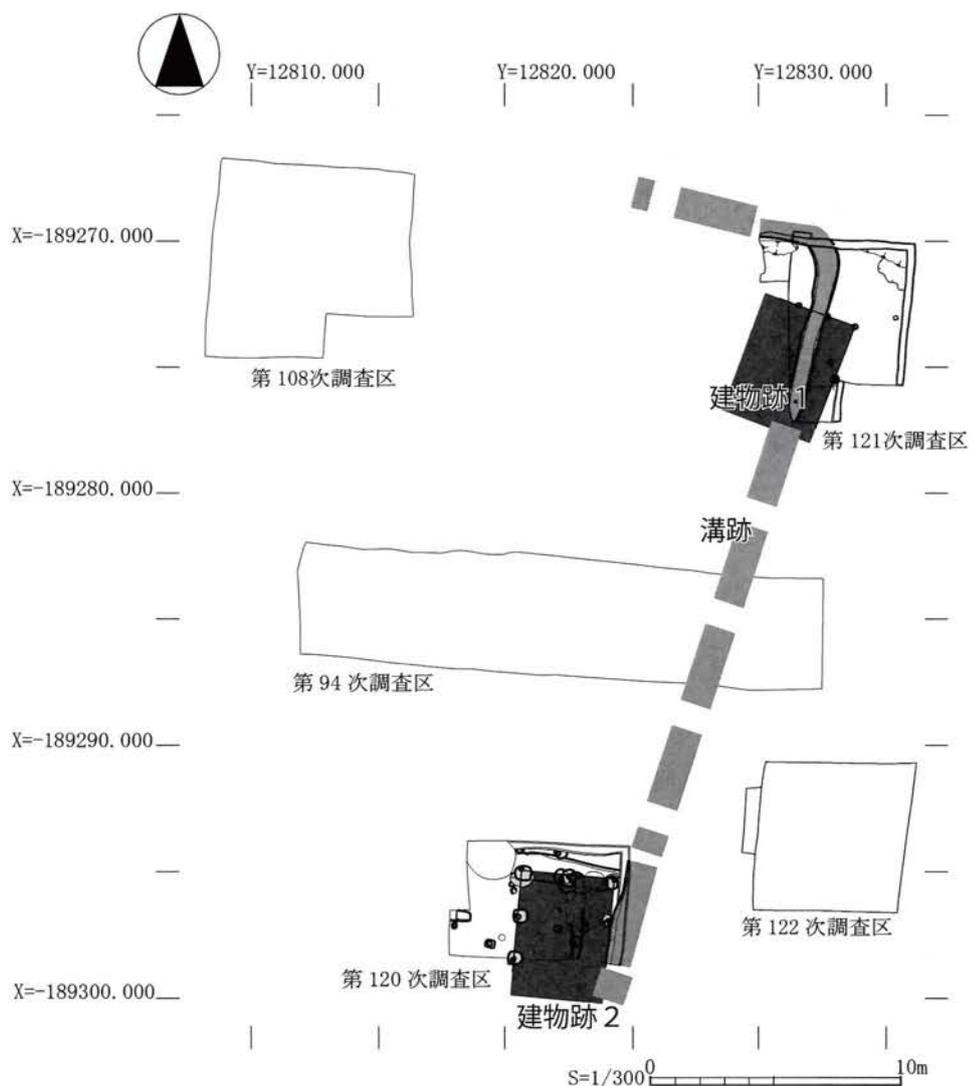
ほぼ同じ高さで水田層を見つけており、当該区の全域に広がっていることを確認しました。これまでの調査でも本遺跡から西に隣接する新田遺跡<sup>にいだ</sup>にかけての広い範囲には、水田跡が広がっていることがわかっています。今回発見したような大規模な畦畔やより幅の狭い小規模な畦畔を組み合わせると水田の区画をなしていたものと推測されます。

遺物は、土師器<sup>はじき</sup>の破片が少量出土しています。

## 2 古代（奈良時代・平安時代）（第4図）

当該地区は、多賀城南面<sup>ほうかくちわり</sup>の方格地割のうち、南1道路の南側、西8道路の西側にあります。今回の調査では、掘立柱建物跡<sup>ほったてはしら</sup>と溝跡、土壌を発見しました。

このうち、注目されるのが第120次調査区と第121次調査区で発見した溝跡です。二つの調査区の間にある第94次調査区では、上層の調査でとどめたため確認できま



第4図 山王遺跡中山王地区平面図（古代）



溝跡（第121次）北から



建物跡2（第120次）北西から

せんでしたが、後述する埋土の状況が共通することや、その位置関係から同一の溝跡と考えられます。第121次調査区から第120次調査区までまっすぐのびており、第121次調査区の北側で西に向かって屈曲しています。規模は、南北30m以上あり、さらに南と西に向かってのびています。溝跡の埋土は、下層が自然に堆積した層で、上層が人為的に埋められた層であったことから、はじめは水が流れる状態であったのが、何らかの理由で使われなくなり、最後は人の手で埋められたと考えられます。改修の跡が認められないことから、あまり長期間使われなかったと推測されます。

建物跡1と2はいずれも溝跡よりも古いものです。この建物跡は掘立柱建物跡と呼ばれるもので、地面に穴を掘り、その中に直接柱を立てた建物です。今回発見した建物跡は、いずれも柱は抜き取られていましたが、柱の位置や形状を痕跡として確認することができました。

これら古代の遺構の年代は、いずれも8世紀<sup>こうよう</sup>後葉から10世紀<sup>ぜんよう</sup>前葉の年代幅におさまるものと考えられます。その一方で、後述する中世の遺構や堆積層からは、これより古い8世紀前半頃までさかのぼる土器が出土していることから、周辺には奈良時代の遺構が存在していた可能性が考えられます。

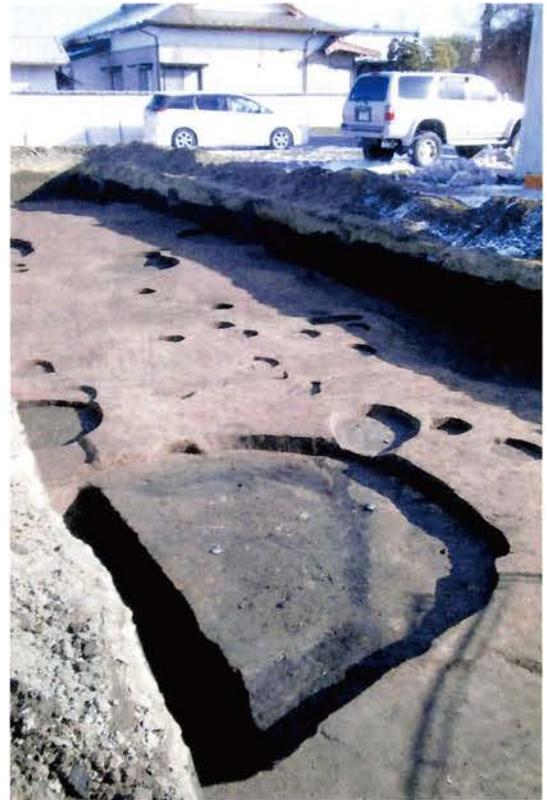
### 3 中世（鎌倉時代・室町時代）（第5図）

掘立柱建物跡と井戸跡、溝跡、土壌を発見しました。

掘立柱建物跡は、いずれも柱を据えるための掘方が小さいものです。調査区が狭いため、建物全体を把握できたものはありません。柱はいずれも抜き取られていました。

井戸跡はいずれも井戸枠を伴わない素掘りのものです。古代の井戸のほとんどが井戸枠を伴うことと比べると大きく異なります。いずれも平面は円形で、断面の形は上方が広がる漏斗状になっています。深さは確認できた井戸跡3では1.7mです。

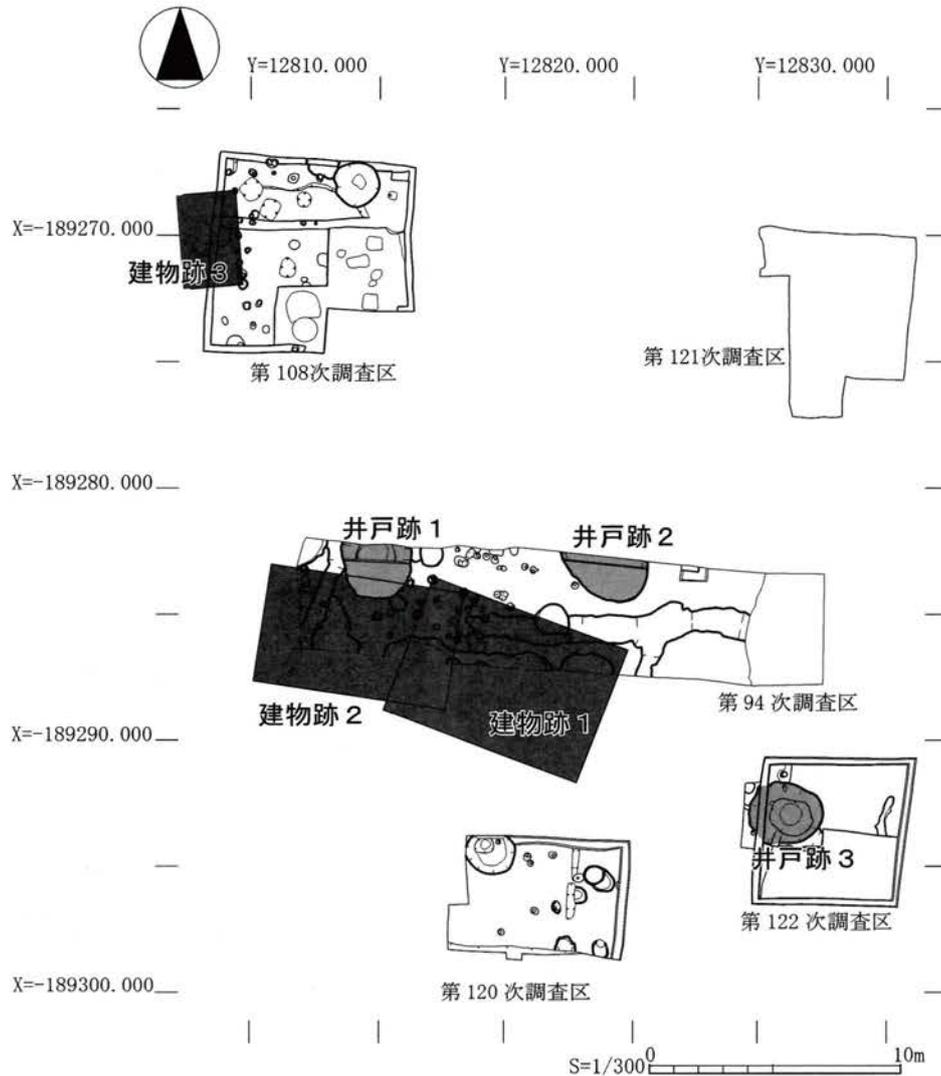
遺物は、古代の土器のほか、古銭の破片が出土しました。



井戸跡1（第94次）北西から



調査風景（第122次）北から 画面中央が井戸跡3



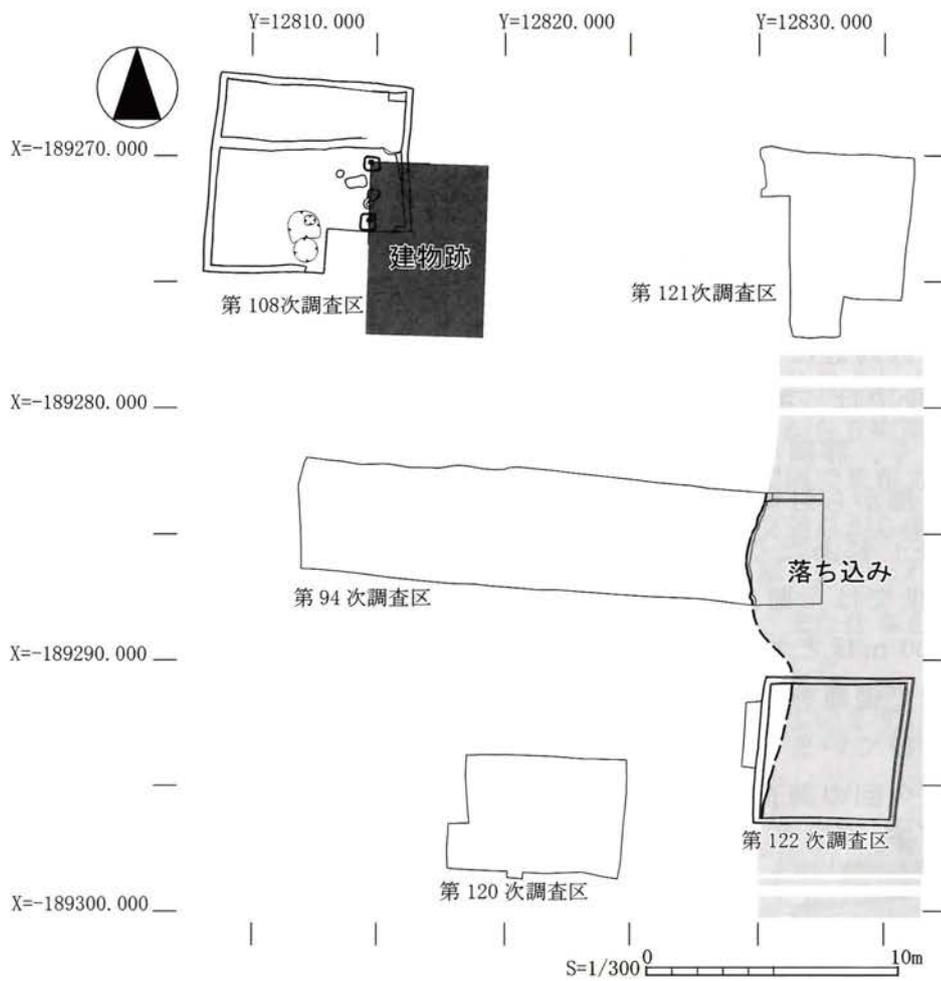
第 5 図 山王遺跡中山王地区平面図（中世）

#### 4 近世（江戸時代）（第 6 図）

掘立柱建物跡と落ち込みを発見しました。

当該地区の北西側で発見した建物跡 1 は、柱を据えるための掘方が、中世の建物跡と比べると大きくなっています。また、北西隅柱では柱材が残っていました。柱は角柱で、樹種は針葉樹とみられます。太さが一辺 13 cm の正方形であることから、台ガンをういて作られたと推測されます。遺物は、柱の掘方から磁器の破片が出土しています。

当該地区の東側では落ち込みを発見しました。幅 6.4 m 以上、深さ 36 cm です。性格は不明ですが、ここから<sup>つつみやき</sup>堤焼と推測される土人形の破片が出土しています。



第 6 図 山王遺跡中山王地区平面図 (近世)



建物跡 (第 108 次) 北から



建物跡の北西隅柱 (第 108 次) 北東から

## 5 まとめ

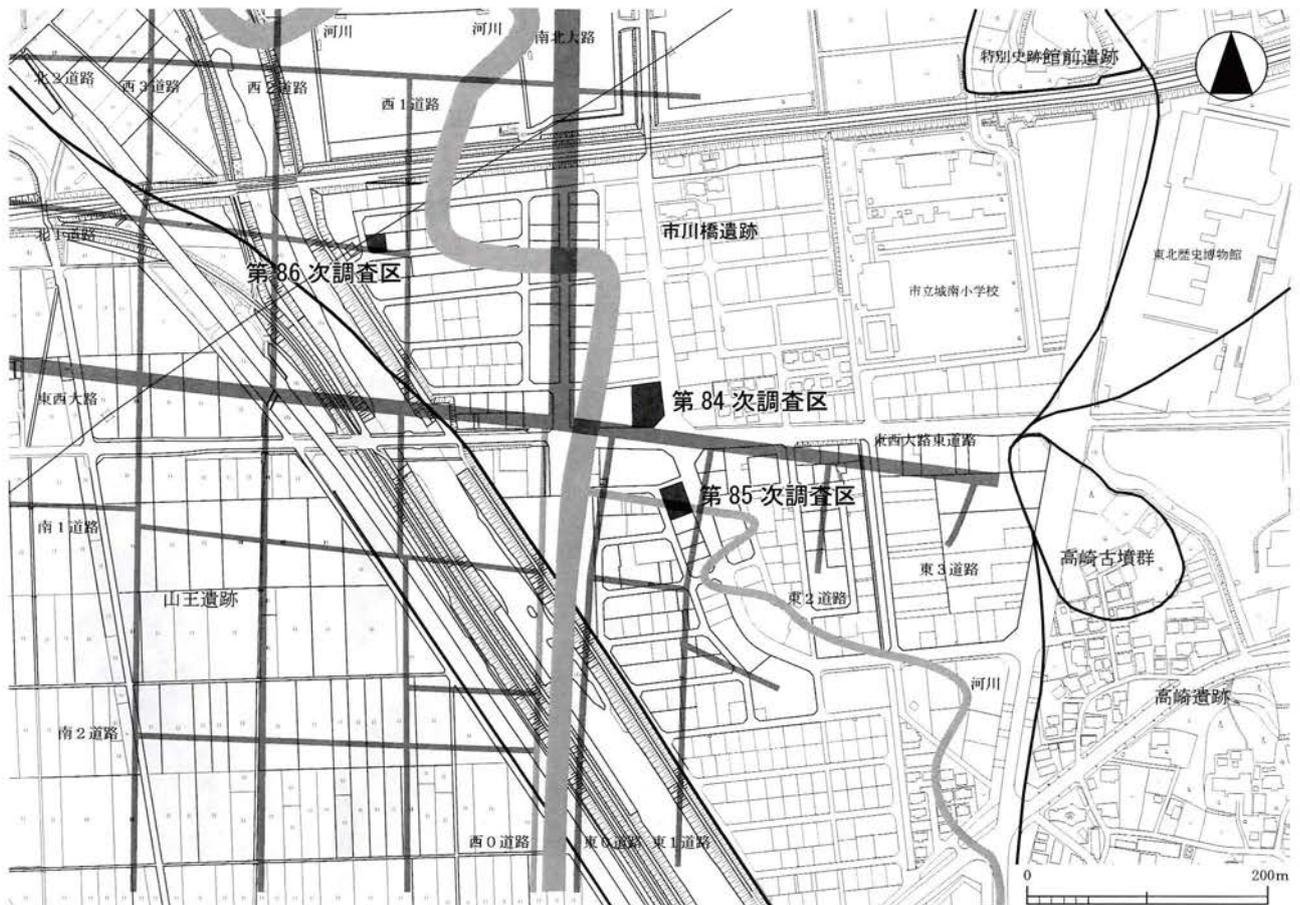
- (1) 山王遺跡の中山王地区を調査し、古墳時代から近世にかけての遺構と遺物を発見しました。
- (2) 古墳時代では、水田跡を発見しました。大規模な畦畔の発見は、当時の水田の区画のあり方を探るうえで貴重な発見といえます。
- (3) 古代では、掘立柱建物跡と溝跡を発見しました。年代は、いずれも8世紀後葉～10世紀前葉の年代であり、古代都市の一部を構成していたものと考えられます。また、より古い8世紀前半頃の遺物が多く出土していることから、当該地区周辺にこの頃の遺構が存在した可能性が考えられます。
- (4) 中世では、掘立柱建物跡、溝跡、井戸跡、土壙を発見しました。出土遺物が少なく、詳細な年代を推測することができませんでした。本遺跡を含む多賀城市西部から岩切・利府にかけての<sup>るす</sup>一帯は留守氏の支配する「<sup>こうゆうみょう</sup>高用名」及び「<sup>なん</sup>南宮<sup>ぐうのしょう</sup>庄」にあたる地域であることから、留守氏との関連が推測されます。
- (5) 近世では、掘立柱建物跡と性格不明の落ち込みを発見しました。当該地区から400 mほど北には南宮地区があり、江戸時代には仙台南分町から南宮、市川を経て鹽竈神社へ至る塩竈街道が現在の旧県道泉塩釜線にほぼ同じ位置で東西にのびていました。この街道沿いに当時の街並みが広がっていたと考えられます。今回の調査では、この街並みの広がりを確認するうえで、貴重な発見といえます。

## V 市川橋遺跡の調査（第84～86次調査）

### 1 はじめに

市川橋遺跡は、多賀城市の中央部を北西方向から南東方向に流れる砂押川の東岸に位置します。標高2～3mの沖積地に立地し、その範囲は東西約1.4km、南北約1.6kmにおよぶ非常に大きな遺跡です。北側に接する丘陵上には、古代(奈良・平安時代)を通して陸奥国府が置かれた特別史跡多賀城跡があり、これと密接に関連する遺跡として知られています。遺跡内では、これまで数多くの調査が実施され、貴重な成果を得ていますが、なかでも多賀城南面に施工された古代の方格地割が注目されます。道路は多賀城政庁中軸線上に位置する「南北大路」と外郭南辺築地から5町南にあって、それと平行する「東西大路」を軸に、およそ1町(約110m)間隔で東西方向と南北方向の小路がつくられています。また、南北大路と東西大路の交差点から南には南北方向の運河もつくられ、水陸の交通網が整備されています。道路で区切られた区画には、国司などの上級役人の邸宅や、多賀城を支えるためにさまざまな仕事をする多数の人々の住居などが配置され、大きなまち並みが形成されていました。

今回報告します調査では、いずれも古代の遺構と遺物が発見されています。



第1図 調査区位置図

## 2 第84次調査

南北大路と東西大路の交差点の北東側に位置します。掘立柱建物跡と溝跡と柱穴と河川跡を発見しました(第2図)。掘立柱建物跡や溝跡に埋まった土の中には、10世紀(西暦900年代)の前半頃に噴火した火山灰が含まれているものがあることから、これらの遺構は、10世紀より新しいものであることがわかりました。

本調査周辺である大路交差点北東区では、これまでの調査で大型の掘立柱建物跡を発見しており(第3図)、公的な利用がなされた場所と考えておりました。しかし、今回の調査区には同規模の建物跡はありませんでした。

## 3 第85次調査

南北大路から東へ2条目の道路(東1道路)と東西大路との交差点の南側に位置します。平安時代のものと考えられる掘立柱建物跡と多数の柱穴が発見されたほか、河川跡も見つかりました(第4図)。

河川跡は、南北大路に沿うように改修される以前の河筋と考えられます。改修後もしばらくは河川として存在したようですが、遅くとも9世紀(西暦800年代)のうちには埋められていたようです。

なお、埋め立てた土の中などからは、当時の人々が日常的に使用した土器が多量に出土しました。



第85次調査の様子

## 4 第86次調査

南北大路から西へ1条目の道路(西1道路)と東西大路から北へ1条目の道路(北1道路)の交差点の西側に位置します。8世紀(西暦700年代)から9世紀頃のものと考えられる掘立柱建物跡と南北方向に平行して延びる小溝跡のままとり柱穴を発見しました(第5図)。建物は少なくとも2棟以上建っていたことがわかりまし



第86次調査の様子

たが、調査範囲が狭かったため、大きさなどは不明です。小溝跡しょうみぞあとのまともりは、畑などにおける畝うねの跡の可能性が考えられています。これらの小溝跡しょうみぞあとは、いずれも建物跡の柱穴よりも古いことから、畑などの生産域せいさんいき→居住域きょじゅういきへと変わっていったことが分かりました。

これまでの周辺の調査においても、主に西側を中心として小溝群しょうみぞぐん→掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとという変化を確認しています(第6図)。本調査で明らかとなった土地利用は、周辺でも同様に展開していたと考えられます。

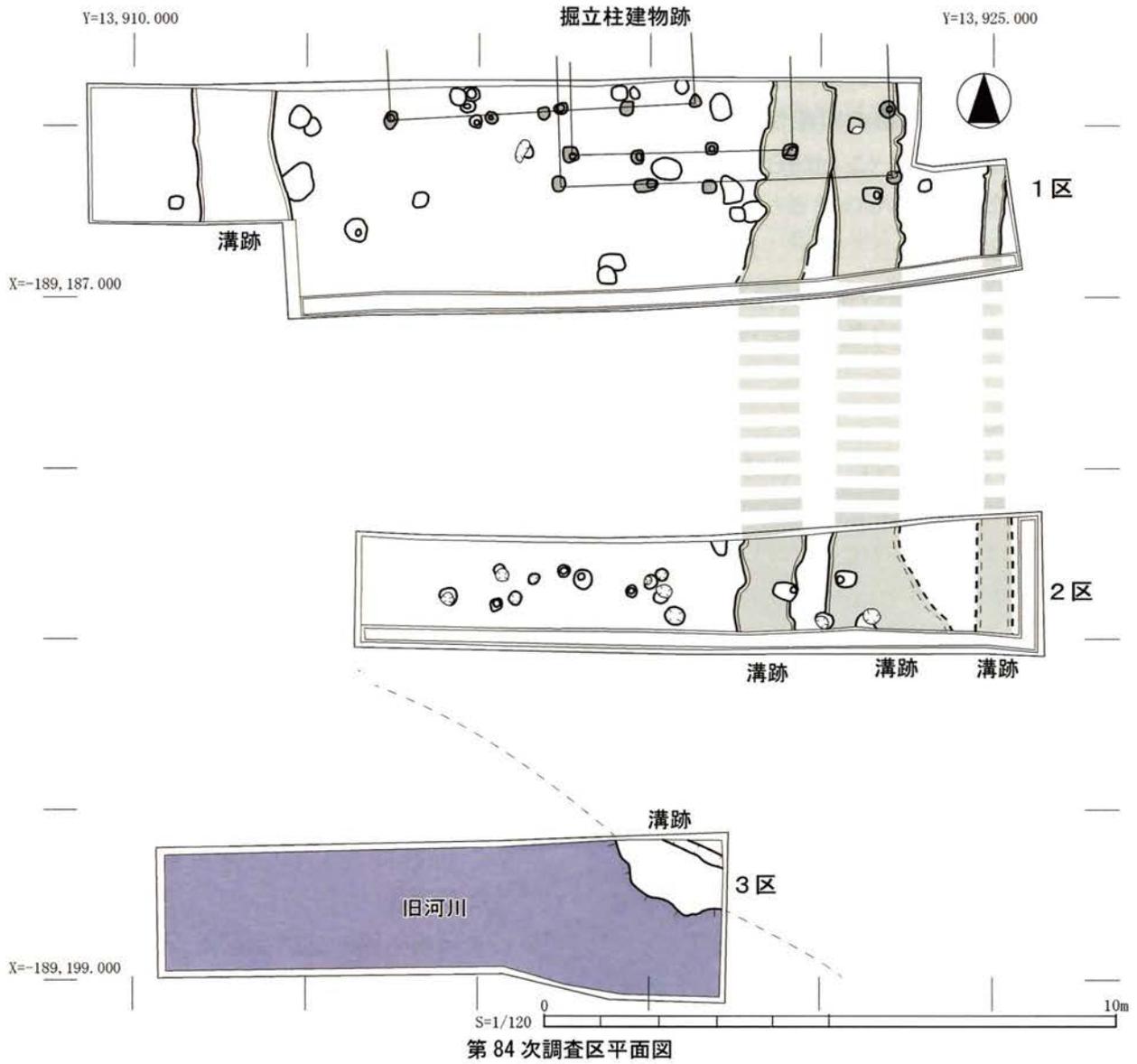
## 5 まとめ

- ・第84次調査では、10世紀以降の掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとや溝跡みぞあとを発見しました。周辺の調査で発見されたような大型の建物跡が見つからなかったことは、方格地割り内の公的な空間利用を考える上での課題となりました。
- ・第85次調査では、平安時代の掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとや9世紀に埋め立てられた河川跡を発見しました。河川から多量の土器が出土していることから、今後の整理作業を通して、土器から当時の人々の生活様式を復元したり、年代のものさしを作り出したりすることが期待できます。
- ・第86次調査では、8世紀～9世紀頃の掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとと小溝群しょうみぞぐんを発見しました。生産域せいさんいきから居住域きょじゅういきへの土地利用の変化が確認できたことは、これまでの周辺の調査成果を補強するものとなりました。

今回の調査は、いずれも小さな範囲のものでしたが、古代のまち並みのメインストリートとなる南北なんぼく・東西とうざいり両大路りょうおおじ周辺の様子が少しずつ明らかとなりました。

## 参考文献

多賀城市教育委員会 「X 市川橋遺跡第84次調査」「XI 市川橋遺跡第86次調査」  
『多賀城市内の遺跡2－平成24年度ほか発掘調査報告書－』多賀城市文化財調査報告書第111集 2013 pp. 34-45、pp. 45-56

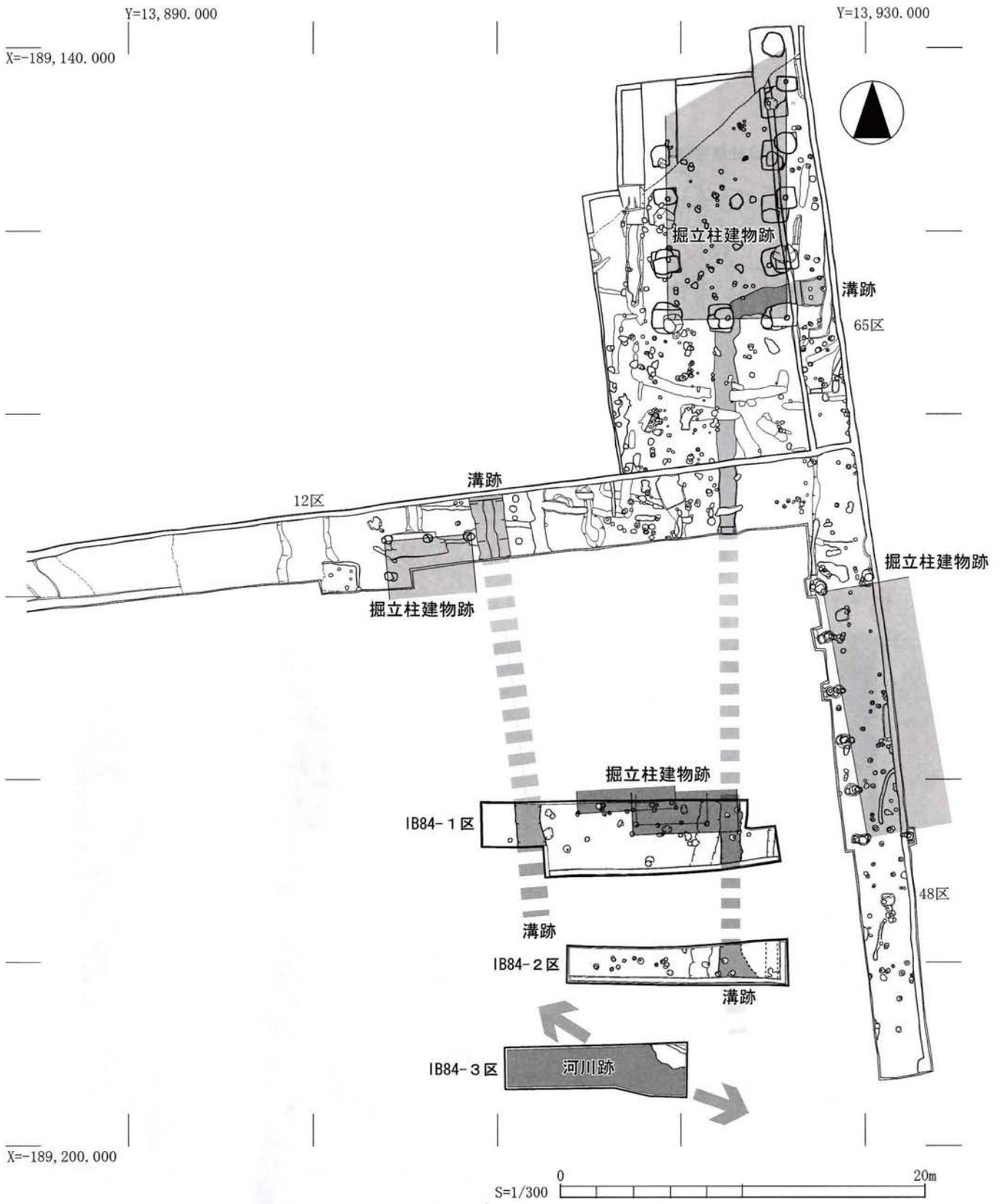


1区遺構検出状況（南西より）

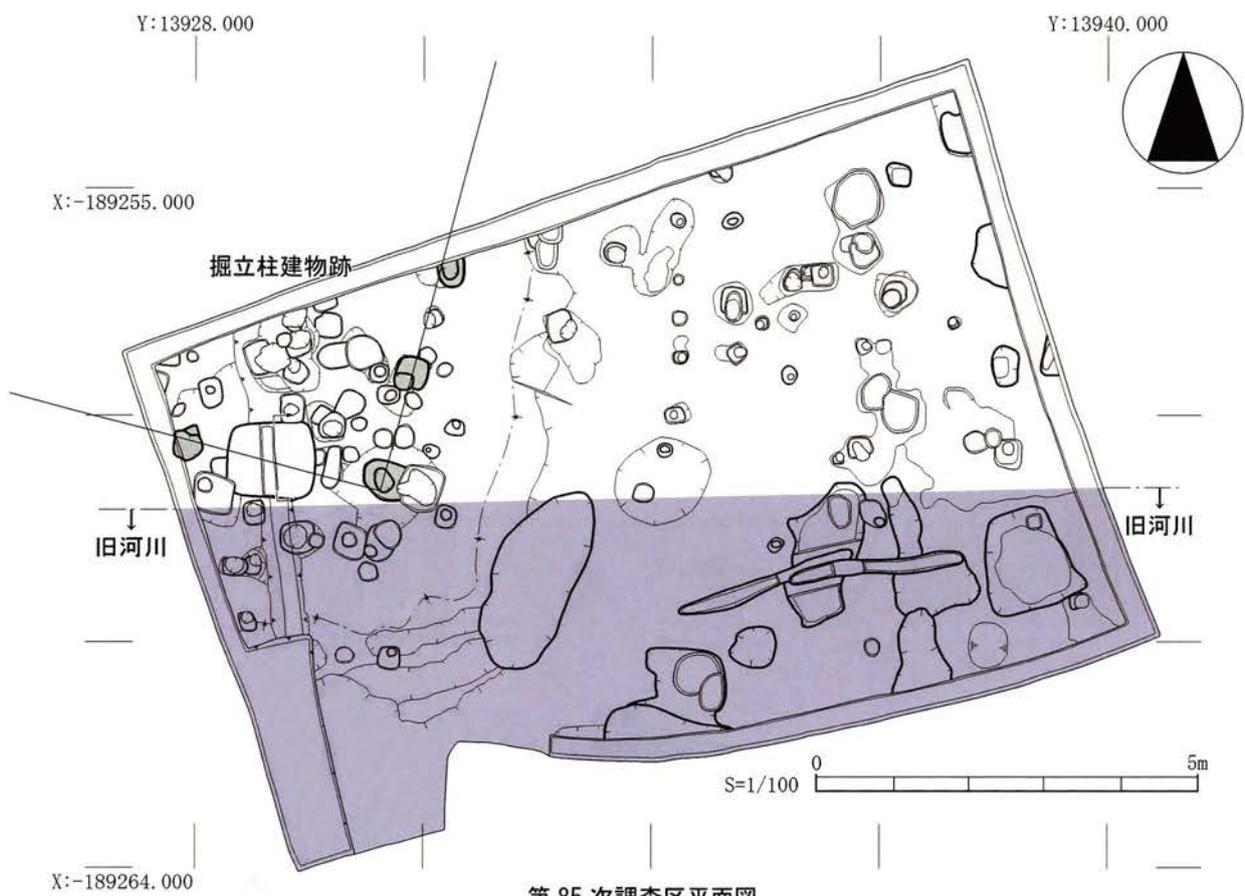


2区遺構検出状況（西より）

第 2 図 第 84 次調査の成果

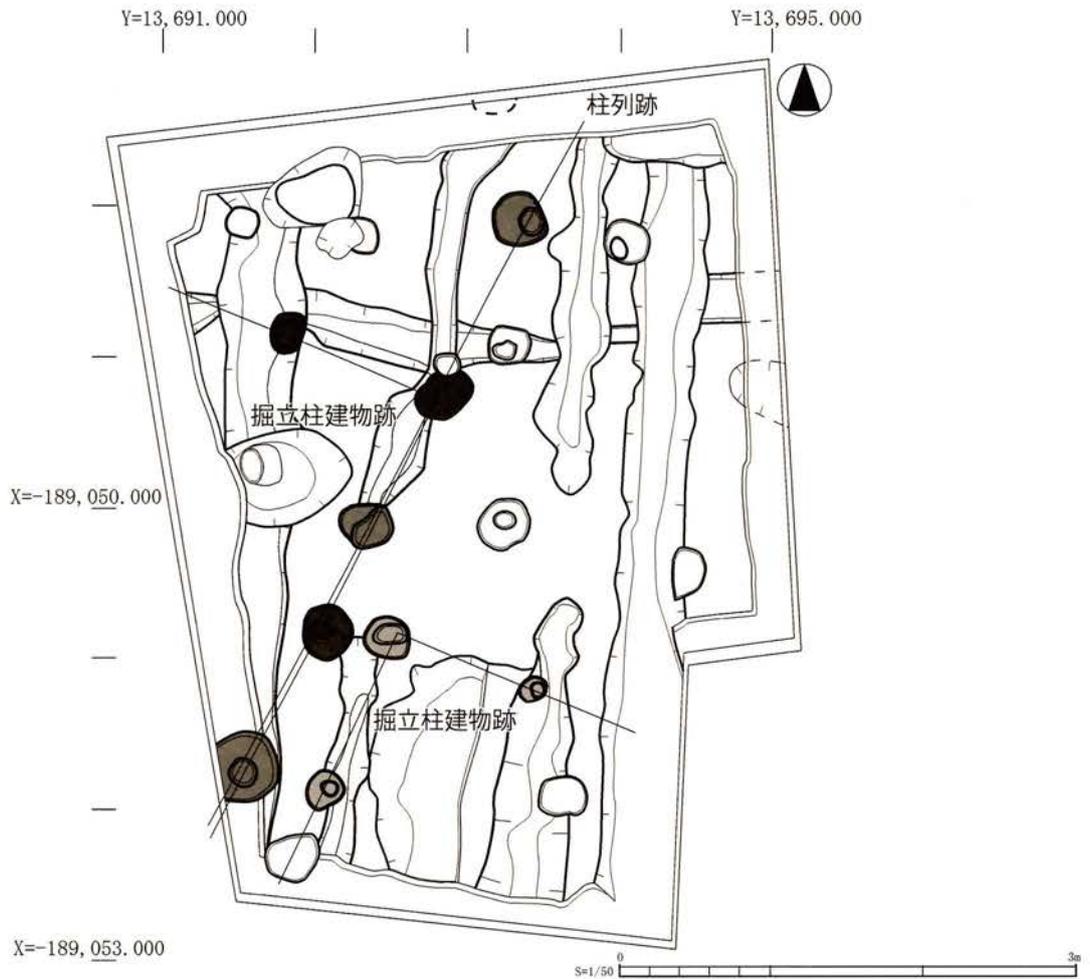


第3図 第84次調査と周辺の調査成果



遺構検出状況（北東から）

第 4 図 第 85 次調査の成果

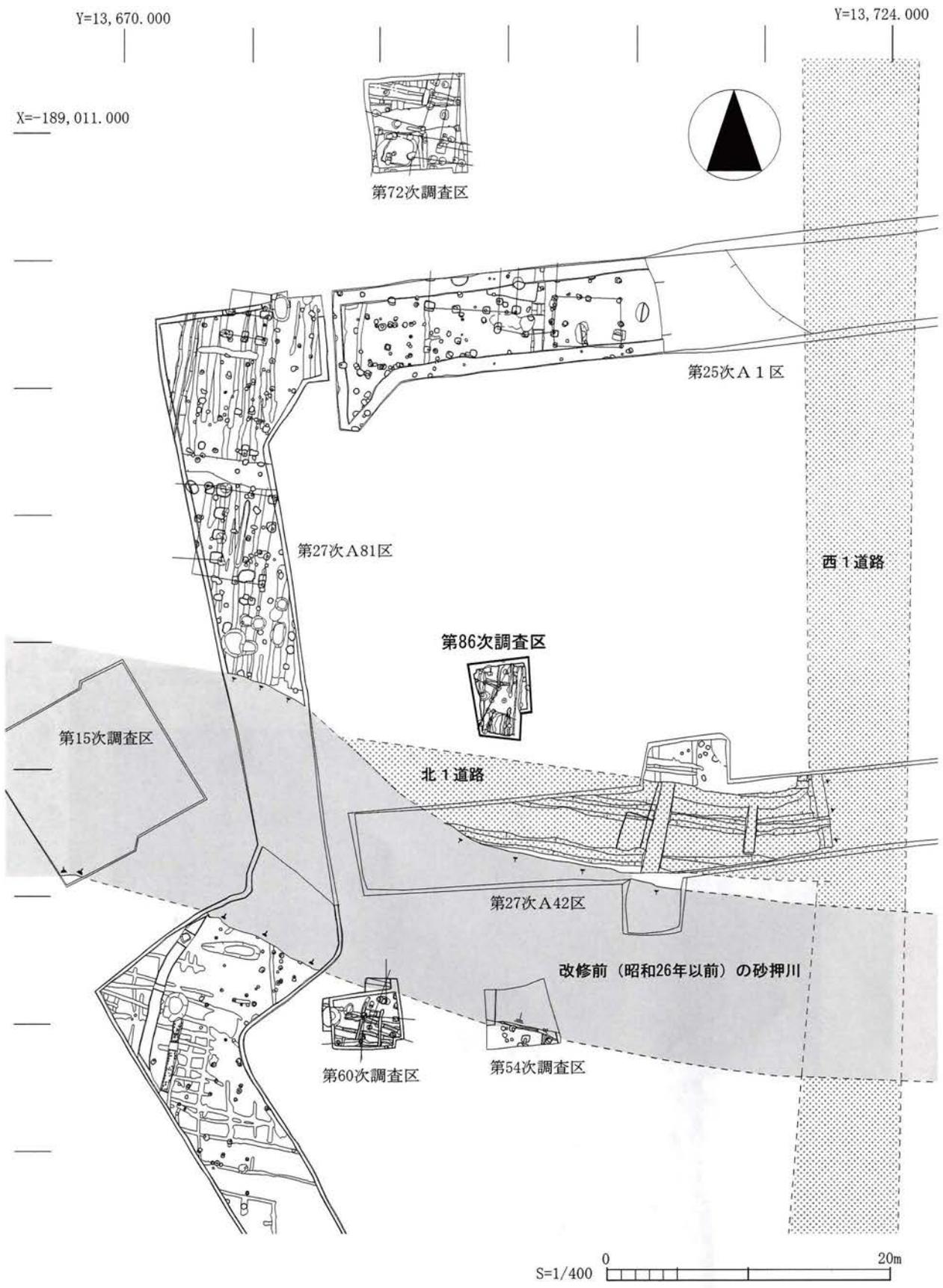


第 86 次調査区平面図



遺構完掘状況（南西より）

第 5 図 第 86 次調査の成果



第6図 第86次調査と周辺の調査成果

